

親でなく親のような存在

原田 宜子

「助けてほしい」という弟からの電話で、私は急いで弟の家に向かった。そこで戸を開けた時の光景を、私は一生忘れることはないだろう。床には服やタオルやゴミが散乱し、台所には洗物が山のように積まれ、机の上には菓子パンが無造作に置かれ、三歳の子供がそれをむさぼり食べている。弟は呆然とし、奥さんは「痛い、痛い」と叫びながら、四つん這いで腰を押さえている。テレビの世界ではなく、身近でこのようなことが起きる現実を、その時の私はまだ受け入れられず、とりあえず目の前のものをただひたすらに片付けていった。

弟とは、弟の結婚後、ほとんど会うことはなくなっていた。転勤の多い仕事をやめ、故郷に家族で帰ってきた。二人の子供が生まれたことも聞いていたが、ほとんど会った

こともなかった。私は子供の頃、父が仕事から帰ってきて、「飯」「風呂」という態度や母親が姑のことで涙する姿を度々見てきたので、私の人生は私の為だけに生きたい、と思ってきた。そんな私でも、この人なら自分の人生を生きられると思った人と出会え、結婚はしたが、その思いに変わりはない。だから、正直、他人の子供に興味があまりなく、出産や子育ては大変そうだという思いと、実際に大変な話を聞くと、それはその人たちが選択したことだと思っていた。

自由に生きてきた私の生活を大きく変えたのは、弟家族だった。

弟の奥さん（以後は彼女と呼ぶ）は腰の痛みを訴えた後も体調不良が続いた。精神的な病気があり、日常生活を送ることが難しくなっていることもわかり、両親や私たちが、弟家族の日々の暮らしの補助をするようになった。食事、子供の送迎やお風呂の世話など、みんなで分担して数ヶ月を過ごしたが、そんな生活も長くは続かず、彼女は家を出て行ってしまった。そして、弟も仕事で海外に赴任することになり、一歳と三歳の子供が残されることとなった。当初、弟は子育てをする気がなく、さりとて彼女が一人で育てられる状態でもなかった。

弟も彼女も自身が一番大切な人たちだった。子供を自分本位に可愛がることはするが、育児はしない。そんなあり得ない状況の中で、「ほんの短い間でも、本気で愛してくれた経験があれば、それはこれから生きていく支えになると思う。」という夫の言葉で、私も子供たちを一時的に受け入れることにした。子供の親になるのではなく、他人の子供を他人の子供として育てるという複雑さ。私は乳母ではない。なぜ、私が育てなければならぬのかという気持ちもあったが、ここで見なかったことにすれば、私も結局自分のことしか考えていない同類だと思った。私たちがこの子供たちに何をしてあげられるのかはわからないが、ギョツと抱きしめることと手作りのご飯を食べさせてあげることがある。いつまで一緒にいられるかもわからないが、私たちにできることがある。やってみよう、と。そして、一歳と三歳の子供との生活が始まった。

私にとつては、急に子供を育てることになって、とにかく目の前のことを必死でこなす日々だった。朝、子供を起こし、ご飯を食べさせてこども園に連れていく。それから夕方までに自分の仕事をして、夕食の準備を済ませて子供を迎えに行く。ご飯を食べさせて、お風呂に入れて、寝かせる。自分も一緒に寝てしまい、夜の事務仕事も進まない

日々で、一日はこんなに短いのかと思った。サラリーマンだった夫は、子供が寝てから帰ってくるのがほとんどだった。

私は小規模な農園を営んでいた。耕さず、農薬や肥料を使わない方法で作物を育て、それを販売していた。子供たちが来てからは、畑を大きく縮小することとなり、私にとつてそれは大きなストレスでもあった。やりたいことをするために、ここにいるのにそれができない。弟は仕事を最優先させて、私はその弟の子供の面倒を見るために仕事を犠牲にしなければならぬのはなぜか。仕事人間の私の父は、「男は仕事だ。男が育児をできるはずがない（男が育児をするのは恥ずかしい。）」と語っている。私の母も「とにかく子供が無事に成長してくれればそれ以上望むことはない」と言って、私がどんな気持ちなのかは顧みられることはなかった。

そんな時、実家に行くと、九十歳を前にした祖母がきまって「いつもありがとう」と私の手を握ってくれた。その笑顔と言葉に、私の心は癒された。昔は経済的な理由、そして戦争中の疎開などもあって、親戚の子供を預かって一緒に暮らすことも少なくなかった話を聞かせてくれた。祖母も高校生くらいの頃、親戚の子供を家で預かることに

なり、よく面倒をみたそうだ。ただ、その難しさもよくわかっていて、だから私のこの選択を温かく見守ってくれていたのだと思う。もう今は施設に入ってしまったって会えないが、私の心のモヤモヤに何も言わずに寄り添ってくれた祖母には本当に感謝している。

子供との生活が半年すぎた頃、彼女から子供を引き取りたいと言われた。当然予想できたことだった。どんなに私たちが愛情を持って育てたとしても、実の親が育てるといえば、私たちには育てる権利はない。ただ、夫婦二人での子育ても途中で投げ出している中、彼女の健康状態や一人で仕事と育児を両立させることを考えると、あまり現実的なことと思われず、どうするのがよいのか判断に迷った。

三歳の子供に母親に会いたいかと聞いてみると、「会いたい。でも、一緒に暮らしたくはない。」これが子供の答えだった。

暮らし始める中でも色々なことが見えた。子供たちの食事をする姿には絶句した。口の中にひたすらに物を詰め込んでいく。飢餓の子供のような食べ方。しばらくして、時々、二歳の頃の話をしてくれた。やはり彼女の体調が悪い時も多く、あまりご飯を食べさせてもらえなかった時があったようだった。

ご飯よりもおかずが好きで、ご飯も味付けご飯が好き、そして、白いふわふわのパンと甘いお菓子が好きな三歳児に、私はご飯を炊いて言った。

「うちのご飯は、私たちが汗水たらして、二人の健康と幸せを祈って育てたお米だから無駄にしてはいけないよ。」

そのうち、家の炊き立てのご飯が一番好きというようになり、白ご飯だけでおかわりするくらいご飯好きになった。

私は作物を育て、それを料理することが私の愛情表現と思っていたから、それだけは妥協せずに子供たちにできたことだったと思う。

「親は子供を育てるのは当たり前で、親は子供を目の中に入れても痛くない。一番大切な存在だ」という世の中の「親」という存在の暗黙の了解がある。私も「親は責任持つて子供を育てるのが当たり前」と思っていた。でも今回のことで、この認識のせいで苦しむ親子もたくさんいるのではないかと思うようになった。彼女に対しても、両親や私は無意識にそんな認識を向けていなかっただろうか。彼女が子供を引き取ると言ったのは、そんな思いもあったからではなかったか。

特に女性は、子供が成長するまでのある程度の期間、自分のやりたいことよりも育児を優先させることになり、それを楽しめる人、それに苦しむ人もいる。乗り越えることができない場合、子供が犠牲になってしまう。

例えば、昔の日本でも家族が大勢いて、親戚や近所の子供の面倒をみたり、時には叱ったりするなど、みんなで地域の子供を育てることが当たり前であった。いざ他人の子供を育てる経験してみると、弟夫婦の子育てのことも、もう少し早く気にかけていれば、今とは違った未来があったのではないだろうか。

彼女からの訴えがあった後、子供の監護権の調停、離婚調停などがあり、子供がどうなるかわからない状態が続いた。調停では「子供にとって母親が育てるのが一番よい」というのが暗黙の前提であったものの、弁護士さん、裁判所の調査官の方などにも事実を伝え、こども園の先生方も子供のことを考えて発言して下さった。そして、子供たちはまだここにいます。もちろん、これが正しかったのかはわからない。でも、負の連鎖は断ち切れたのではないかと思う。

今、子供たちは六歳と八歳になった。下の子もこの春、小学生になった。こども園を

卒園する時、「ここまで元気に育ってくれてありがとう」と言うと、「ここまで大きくしてくれてありがとう。ここに来られて本当に良かった」と笑顔で抱きついてきた六歳児に、私も報われたような気がした。

最初の二～三年は、今後父親か母親と暮らすことを前提に、親の存在を立てつつ、自分のことはできるだけ自分でできるようにとの思いで育てた。弟の仕事のない週末は弟と子供たちが一緒に暮らし、彼女の希望で毎月面会交流も行った。

週末に父親と過ごし、毎月母親と過ごした後は、きまって子供たちの心も荒れて、生活のリズムが崩れた。きつと色々複雑な思いがあっただろう。その立て直しに時間を使い、ようやくリズムが戻るとまた同じことが起きる生活の繰り返しだったが、いつかは親の元に帰るのだから、その時のためにと思いい耐える日々だった。しかし、弟も彼女も根本が変わることはなかった。

コロナウイルスの流行と共に、母親との面会はできなくなった。また、上の子が二年生になる時に父親との週末の生活もやめた。

子供たちにとって、我が家が本当の家になった時だったように思う。私たちにあって

親でなく親のような存在

も、親が誰かは別にして、私たちが育てるといふ覚悟を持った時だった。そういう意味では、私たちはまだ家族になって一年。あと十年ほどは一緒に暮らす時間があるだろうか。